参考資料２

記者発表資料

平成 20 年 2 月 20 日
中央防災会議事務局（内閣府（防災担当））

中央防災会議「災害教訓の継承に関する専門調査会」（第11回）
議事概要について

１．専門調査会の概要

日 時　：　平成２０年２月８日（金）　１０：００～１２：００
場 所　：　虎ノ門パストラル新館５階「ローレル」
出席者　：　伊藤座長、池谷、北原、寒川、清水、首藤、鈴木、関沢、平野、藤井、溝上の各委員、安田、室﨑の各小委員会委員、加藤内閣府政策統括官(防災担当)、田口内閣府大臣官房審議官 他

２．議事概要

小委員会における検討経過等について北原委員（小委員会座長）他から報告した後、「1959伊勢湾台風」に関する報告書案について分科会主査から説明を行い、各委員からは以下のような意見等が出された。なお、詳細な議事録については、後日各委員の確認を経た後に公表する。

小委員会における検討経過等について

＜「1923 関東大震災」＞

○ 海外からの国際支援や援助についても触れられると良い。また、芥川龍之介など当時の文化人が、日常生活などいろいろな状況を見ながら、短い文章ながら、かなり突いたところを述べており参考になる。

○ 市街地住宅の復興で、建築や都市計画的なものが主になっているが、消防・防災体制や技術などソフト面でのその後に与えた影響、あるいはそれが生かされなかったらその教訓があると良い。

○ 「震災直後の混乱による被害の拡大」について、大きな災害になると生活が完全に奪われ地域が崩壊する。この災害ではこのようなレベルからさらに発展し、社会の秩序が崩壊されていく。このあたりの流れを捉えしっかり説明していくと良い。

＜「1858 飛越地震」＞

○ 肝心なのは１回の地震による大きな崩壊で流域が変わってしまったということ。単なる常願寺川が変わったのではなく、１つの流域が全く変わってしまったという視点が大切である。また、常願寺川はある意味で土砂との闘い

の場であり、この災害の前にもいろいろな対策がなされている。その情勢などをコラムで紹介したほうが良い。

報告書案について

＜「1959 伊勢湾台風」＞

○ 伊勢湾台風は我が国の防災対策に大きな一石を投じ、転換をもたらした災害である。この報告書は大変論理的な構成でまとめられており、一つ一つ要因を押さえ、災害を知らない人が読んでも大変わかりやすくまとまっている。

○ 温暖化についても触れられ、これからの災害に対してどう学んでいくかという観点からもまとめられており、価値のあるものとなっている。

○ 高潮・洪水は津波と違ってものすごく高いところまであがることはない。例えば１階は水につかるが、２階や屋上に逃げれば命が助かることが非常に多い。地盤の低い危険地帯に家を建てて住むのなら、安全な逃げ場所を必ず自己責任でつくっていくということをしないと死亡者ゼロにならない。

○ それぞれの人が自分の住んでいる場所の危険性、「災害環境」をいかに把握しておくことが大切である。

○ 優れた報告書が次々出ているけれども、実際にどう生かされるかということが重要。ＢＣＰ（事業継続計画）の国際スタンダードな議論の場の中でも、報告書を活用して日本の視点を盛り込んでいくべきである。

○ 報告書を専門家以外の人に興味を持ってもらうことが大切。教育現場でも話ができるような配布、公表の仕方を工夫してほしい。

＜問い合わせ先＞
内閣府政策統括官（防災担当）付
災害予防担当　企画官　山谷　英之
　　同　　主　査　岩間　功
TEL：03-3501-6996（直通）